

# ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベント教会 - 第二十二

Jeff Pippenger

2026-01-02

## 二十二番

前回の記事では、古代イスラエルを「まむしの子ら」という世代として捉える四つの言及のうち、ちょうど半分まで進んだところだった。マタイでは、ヨハネもイエスも、パリサイ人とサドカイ人を「まむしの子ら」と呼んでいる。ヨハネは、彼の後に来るイエスをご自分の打ち場を徹底的に清めると教えたことによって示される、試しの過程の始まりを表している。イエスは、シェバの女王とニネベに言及して、ヨハネの試しの過程にさばきの過程を付け加えた。さばきは第四世代に行われ、さばきではある者たちは蛇として現れる。彼らの父は悪魔だからである。さらにイエスは、しるしが目の前にあるのに、第四世代がしるしを求めるといった問題を付け加えた。

マタイ二十三章では、パリサイ人とサドカイ人への「災い」が示され、試しと裁きの過程が再び最後の世代と結びつけられている。二十二章は、二十三章の「災い」のための舞台を整える。

ファリサイ派の人々が集まっていたとき、イエスは彼らに尋ねて言われた。「あなたがたはキリストについてどう思うか。彼は誰の子か。」

彼らは彼に「ダビデの子」と言った。

彼は彼らに言った。「では、ダビデは霊によってどのように彼を主と呼んでいるのか。『主はわが主に言われた。「わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」』と。もしダビデが彼を主と呼んでいるのなら、どうして彼がダビデの子であり得ようか。」

そして、誰も彼に一言も答えることができず、その日から後は、誰一人として彼にこれ以上何も質問しようとはしなかった。マタイ 22:41-46。

これ以上の関わりに扉が閉ざされると、イエスは次の章で八つの災いを述べられる。13節では、天の御国への門を閉じることに對する災いが述べられている。天の門からは、後の雨が注ぎ出される。八つの災いは、誰も開けることのできない戸を開け、誰も閉じることのできない戸を閉じると称する者たちについてのものである。幻のうちに、シスター・ホワイトは、キリストに従って至聖所に入らなかった者たちが、空になった聖所に祈りを送っているのを見せられた。そこではサタンがキリストのふりをして、すべてが大丈夫だと彼らに信じ込ませていた。彼らは聖所を再び開き、至聖所を閉ざしてしまっていた。

多くの人々は、キリストを退けて十字架につけたユダヤ人の歩みを戦慄して眺める。そして、主が受けられた恥ずべき虐待の歴史を読むとき、自分たちは主を愛しており、ペテロのように主を否認することも、ユダヤ人のように主を十字架につけることもなかったであろうと思う。しかし、すべての人の心を読み取られる神は、彼らが感じ

ていると公言したイエスへの愛を試みられた。天の全世界は、第一の天使のメッセージがどのように受け入れられるかを、最大の関心をもって見守った。ところが、イエスを愛していると公言し、十字架の物語を読むとき涙を流した多くの者が、主の来臨の良い知らせを嘲った。彼らはそのメッセージを喜んで受け入れる代わりに、それは惑わしだと宣言した。彼らは主の現れを愛する者たちを憎み、教会から締め出した。第一のメッセージを退けた者は第二のメッセージによっても益を受けることができず、また、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る備えをするための「真夜の叫び」によっても益を受けなかった。さらに先の二つのメッセージを拒んだことによって、彼らの理解は非常に暗くなり、至聖所への道を示す第三の天使のメッセージの中に何の光も見いだせなくなっている。私は見た。ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、名ばかりの教会はこれらのメッセージを十字架につけてしまった。そのため、彼らは至聖所に入る道について何の知識もなく、そこでのイエスのとりなしによって益を受けることもできない。無益な犠牲をささげたユダヤ人のように、彼らもイエスが去られた聖所に無益な祈りをささげる。そしてサタンは、この欺きに満足して敬虔を装って、自称クリスチャンであるこれらの者の心を自分のほうへ導き、自らの力とするしと偽りの奇跡をもって働き、彼らを自分の罠にしっかりと絡め取る。

『初期の著作』、258-261。

第14節は、やもめの家を食い尽くし、長い祈りをする事への災いである。第15節の災いは、彼らの改宗者を自分たちよりも二倍も地獄の子にしてしまうことに対するものである。16節から22節では、悪者たちが神殿にかけて誓っている。

これらはホワイト姉妹の言葉ではなく、主の言葉であり、その使者があなたがたに伝えるようにと私に託されたものである。神は、あなたがたがもはや彼の御旨と食い違う働きをしないようにと呼びかけておられる。自らをキリスト者と称しながらサタンの特質を現し、霊と言葉と行いにおいて真理の前進を妨げ、確かにサタンが導く道をたどっている人々について、多くの教訓が与えられた。彼らは心のかたくなさのゆえに、本来彼らのものではまったくない、行使してはならない権威を握りしめている。大いなる教師は言われる、「わたしは覆す、覆す、覆す。」バトルクリークでは人々がこう言う、「主の宮、主の宮、私たちは主の宮だ。」しかし彼らは普通の火を用いている。彼らの心は神の恵みによって柔らげられ、従えられてはいない。Manuscript Releases, 第13巻, 222ページ。

23節と24節では、正義とあわれみと誠実をないがしろにすることに対して「災いだ」と言われています。25節と26節は、杯の外側だけを清め、内側は清めないという見せかけについて述べています。

「『私たちはこの宝を土の器に入れている。すぐれた力が神のものであって、私たちのものではないことが明らかにされるためである』と、使徒は続けた。神は罪のない天使たちを通してご自身の真理を告げ知らせることもできたが、これは神のご計画ではない。神はむしろ、弱さを抱える人間を、そのご計画を成し遂げるための器としてお選びになる。値しれぬ宝は土の器に納められている。人間を通して、神の祝福は世界へと届けられる。彼らを通して、神の栄光は罪の暗闇の中に輝き出るのである。」『使徒行伝』、330。

それから、二十七節と二十八節は、悪しき者たちを白く塗られた墓だとし、イザヤ書十二章のシェブナと結び付けています。そこでは、シェブナは自分で造っていた見事な墓を誇っていましたが、彼自身がそこに入ることは決してないはずでした。というのも、神が彼を御口から吐き出して遠い野へ投げ捨てることになっていたからです。その遠い野は、ベテルの偽りの預言者の墓によって表されており、この偽りの預言者は、不従順な預言者を導いて、自分と同じ墓に葬らせました。そして第八のわざわいはこう言います：

災いだ、律法学者とパリサイ人たち、偽善者たちよ！あなたがたは預言者たちの墓を建て、義人たちの墓を飾り、そして言うからだ、『もし私たちが先祖たちの時代にいたなら、預言者たちの血に彼らと共にあずかることはなかつたらう』と。それゆえ、あなたがたは自分で自分に証言している。自分たちが預言者たちを殺した者たちの子であると。では、あなたがたは先祖の量りを満たせ。

蛇ども、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰を免れることができようか。

それゆえ、見よ、わたしはあなたがたのもとへ預言者と知恵ある者たちと律法学者を遣わす。あなたがたはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者をあなたがたの会堂でむち打ち、町から町へと迫害するであろう。こうして、地上で流されたすべての正しい者の血、すなわち義人アベルの血から、あなたがたが神殿と祭壇の間で殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまでが、あなたがたの上に臨むことになる。

まことに、あなたがたに言います。これらのことはみな、この世代に降りかかります。マタイによる福音書23章29-36節。

蛇たち、すなわち「まむしの子ら」は、その箇所では裁かれている。そこにおける裁きは、シバの女王とニネベの証しに基づくのではなく、アベルからザカリヤに至る血によってなされる。第四の世代、すなわちまむしの子らは、古代イスラエルの外的歴史からの二人の証人と、古代イスラエルの内的歴史からの二人の証人によって裁かれる。ルカ3章は、第四にして最後の世代のまむしに関する四つの言及のうち最後のものであり、単にマタイ3章の平行記事である。これら四つの言及は、神の家の最終的な裁きの時、すなわち第四の世代において、一方の者たちはサタンの子らとしての品性を現し、もう一方の者たちは神の子らとしての品性を現すことを示している。分離を開始する試練の過程は、契約の使者の道を備える使者が荒野で声を上げるときに始まる。

聖書という聖なる織りの中では、名は単なるラベルではなく、歴史の表層の下でささやかれる第二の歌のように、贖いの核心を明らかにする予言である。アダムからノアに至る子孫たちの名前の意味を一つの文にまとめると、その系譜が示す歴史に呼応するメッセージが生まれる。アダムは「人」、セツは「定められた者」を意味する。エノシュは「死すべき者」（死に服する）、ケナンは「悲しみ」を意味する。「神の賛美／祝福」（マハラルエル）を通して、天は「降りて来る」（ヤレド）。天は「献げられた者／油注がれた者」（エノク）として下り、彼は息子メトシェラ（「彼が死ぬとき、それが遣わされる」）を通して裁きのメッセージを宣べ伝えた。彼の死は、レメク（息）がメトシェラに結びついたこと、すなわち「真夜中の叫び」が第二の天使に結びついたことによって表される、聖霊の「力強い」注ぎの頂点となるはずであった。メトシェラは第二の天使であり

、レメクはノアの洪水で頂点に達した「真夜中の叫び」であった。

さらに要約すると、これらの名はこう告げている。「人は初めのアダムのゆえに、悲しみと死に服する死すべき者として定められた。しかし神の祝福により、キリストはご自身をささげて下って来られ、十字架上の死によって裁きを宣言された。その後、聖霊の力強い注ぎが続いた。」

これら十の名は、創造から後の雨に至る地上の歴史をたどりつつ福音のメッセージを要約しており、その頂点は再臨にある。名々に隠されたこの象徴は、黙示録においてその対応が見いだされる。創世記はアルファの系譜を示し、黙示録7章の十四万四千人は、封印を受けた残りの者におけるオメガの成就を示している。

ユダは「賛美」を意味し、ルベンは「見よ、息子だ」、ガドは「幸運／軍勢」、アシェルは「幸い／祝福された」、そしてナフタリは「格闘」を意味する。マナセは「忘れさせる」、シメオンは「聞くこと」、レビは「結びつけられた／添えられた」、イッサカルは「報い」、ゼブルンは「誉れ／住まい」、ヨセフは「増し加える」、そしてベニヤミンは「右の手の子」を意味する。

ユダ族の獅子に従う者たちは神の子らであり、ヤコブがそうしたように神と格闘する試練の過程を通る中で、幸いを与えられている。この格闘を通して、神の御言葉を聞くことによって生み出される聖化の過程において、彼らの罪は忘れ去られ、彼らは契約関係においてキリストに結び付けられる。彼らへの報いは、神が彼らを用いて御国を増し加え、その右の手の子らとして大いなる群衆をバビロンから呼び出しておられる中で、天にあるところでキリストと共にその御座にあって栄誉をもって座することである。

レアの六人の息子は、ルベン、ユダ、シメオン、レビ、イッサカル、ゼブルンであった。彼女のはしためジルパ（その名は「香しい滴り」を意味する）には、ガドとアシェルという二人の息子がいた。ラケルの二人の息子は、ヨセフとベニヤミンであった。ラケルのはしためビルハの名は「内気または臆病」を意味し、彼女の息子はダンとナフタリであった。予言的に見れば、ここに示された系譜はいくつか考慮すべき系統を提示している。創世記第5章のアルファと十世代とは異なり、オメガには十二人の子孫がおり、独自の預言的な変数を備えている。十四万四千人の中では、ダンは言及されておらず、マナセが兄弟であるエフライムに取って代わった。

創世記のアルファの系譜は、黙示録のオメガの系譜と一致している。というのも、創世記は救いにおけるキリストの神的なわざを示し、黙示録は、そのアルファの預言のオメガにおける成就において、まさにそのアルファの預言に示された約束と預言そのものを完全に成就する者たちを明らかにするからである。

これら二つの筋の適用は神学者たちによってしばしば行われるが、「行に行を重ねる」方法論の観点からなされることは決してない。創世記と黙示録の二つの系図は、神が二次的なレベルでも語っておられることの二つの証しとなっている。一方の言葉は、記録されたとおりの書かれた証言であり、その証言の内部には、副次的な筋が象徴的なレベルで示されている。神学者たちはたいてい、創世記と黙示録における名の意味を通して伝えられるメッセージについての表面的な観察以上には進まない。彼らは、自分たちが目にする

ものを、自分たちの人間的な知恵をより多く物語る単なる新奇なものとして扱い、名の意味の中にある比喻を見抜くという彼らの敬虔ぶった能力によってそれが裏づけられているとする。彼らは、イシュマエルの十二人の子らに示されたメッセージを決して見ない。マタイとルカにあるイエスの系図も正しく見ていない。ユダの最後の七人の王の系図やイスラエルの最後の七人の王の系図、ユダの最初の七人の王の系図、あるいはイスラエルの最初の七人の王の系図を見ていない。

彼らには見えていないと言うとき、私の意味するところはこうだ。Google に、これらの系譜についての教えがあるかどうか尋ねれば、創世記のアダムからノアに関しては「はい」、そして十四万四千についても「はい」と答えるだろう。だが、創世記11章にあるアブラムの十代の子孫をこのように当てはめているか？

いいえ。カインの系図やセツの系図にそれを当てはめているか？ 当てはめてはいるが、実際の意味からあまりにもかけ離れていて、まるで別の話題のようだ。マタイとルカにあるキリストの系図にも、疑いなく言及しているが、ここでもまた大きく的を外している。それがなぜ問題なのか、とあなたは問うだろう。私がこれらの預言的な系譜の筋道を概観し、冒頭から、聖書の預言の象徴としての第四世代の重要性を見極めようとしているのだ、とはっきりさせておきたいからだ。これらの系譜の概観はその点で助けになるだろうが、これから続く事柄の簡単な要約こそが、これらの系譜の筋道について理解すべきすべてだと考えるのは、誰にとっても怠慢というべきだ。

アダムからノアに至る系図の後、創世記四章と五章には二つの系統の系図が見られる。その二つの系統は、カインの子孫とセツの子孫によって示されている。アダムからノアまで十代を示す系図とは異なり、セツとカインの系統はいずれも八代である。このため、それらは四代ずつの二つの時期として扱われる。セツとカインは契約の象徴であり、カインは、イザヤ書二十八章と二十九章において、押し寄せる災いのときに無効にされる「死の契約」を結ぶ者たちを表す。彼らは自分の家を砂の上に建てる者たちである。岩の上に建てる者たちは、第一ペテロの手紙二章において、主の恵み深さを味わった者、すなわち「選ばれた世代」として示されているように、いのちの契約を結ぶ。「多くの者」は砂の上に建てるが、「少数の者」だけが選ばれる。

カインの系譜は、名の交響曲の中に響く反逆の和音である。というのも、その名々は、天に打たれたのち、虚しい人間の栄光が人を目的なき放浪へと駆り立てることを示しているからだ。警告を顧みず、カインの系統は、復讐に燃える人間の力に覆われ、人間の諸技芸において表現される、鉄の文化を鍛え上げる偽りの神性を標榜する。それは美しいが、暴力的で、希望に乏しい。直前の一文は、名から導かれるカインの八代のメッセージの概観である。

セツの系譜は、カインの系譜に対して、恵みをもって応える。人類に定められた人の弱さの中で、神を呼び求める者は、天が下ってくるとき、その悲しみが賛美へと変えられる。栄光へと上る道を忠実に歩み、試練の期間を過ごし、「希望」の叫びが救いの水を通して安息をもたらすに至る。最後の文は、セツの八代の名から導かれるメッセージの概観である。

八世代を四世代ずつ二つの組に分ける根拠は、契約の第一段階で確立される。すなわち、エジプトでの奴隷状態に関する預言が400年と定められ、さらにその400年は第四世代に終わるとされたときである。パウロの証言がアルファ契約の預言に組み込まれると、各期間が四世代で構成される215年の二つの期間が導き出される。430年における八世代は、215年ずつの二つの期間を表している。第一の期間は、ヨセフを知っていた善良なファラオによって表される。215年後、ヨセフを知らない新しいファラオが現れた。こうして次の四世代の組が始まった。

八世代を等しく二つの期に分け、各期を四世代から成る独自の期として明確に区分するという捉え方は、カインとセツの八世代を同じ方式で当てはめることを裏づける。その当てはめを行うと、セツの八世代がカインの八世代と対応づけられる。カインは獣の刻印を受ける多数を表し、セツは神の印を受ける少数を表す。カインは人間性のしるしであり、セツはノアの契約という文脈において、人間性と神性が結合したしるしである。一方、ヨセフとモーセの系統はアブラムの契約という文脈にある。

そして第11章では、選民の系譜はセムからアブラムまでの十の名によって表されている。第11章はバベルの塔の物語であると同時に、アブラムによって代表される選民の系譜でもある。第11章は、神と三重の契約を結ぶことになる選民を紹介している。

三番目で最後の段階は、第22章にあるイサクの犠牲であった。

第11章はアルファの始まりであり、第22章はオメガの終わりである。名の意味のうちに神の声を聞くために必要な信仰は、御言葉の数においてその声を聞くために必要な信仰と何ら変わらない。神学者たちが取り上げない系譜の適用の一つは、イスラムの象徴であるイシュマエルの系譜である。

また、これが、名ごとに、またその系図に従って記されたイシュマエルの子らの名である。イシュマエルの長子ネバヨテ、ケダル、アドベエル、ミブサム、ミシマ、ドマ、マッサ、ハダル、テマ、エトル、ナフィシュ、ケデマ。これらはイシュマエルの子らであり、町々ごと、また城砦ごとにおける彼らの名である。彼らはその国々に従って十二の君たちであった。創世記 25:13-16。

これら十二の名の定義を一文にまとめると、次のようになる。「預言的に、イシュマエルの子孫は戦士として名高い多産な肌の黒い民であるが、彼らは歴史的にも預言的にも1840年8月11日、さらには2001年9月11日に悲嘆に見舞われる。彼らは聖書の歴史において『東の子ら』と呼ばれる。彼らは、ヘブライ人の聖所の奉仕で用いられる芳香の香料が栽培されるアラビアを起源とする。『アサシン』という語はイスラムの歴史に由来し、密かにもたらされる死を表す。十字軍の時代にはイスラムはカトリックのヨーロッパを取り囲み、包囲し、攻囲したが、その後の抑制は、1840年から1844年にかけての刷新の到来を告げ、また9/11から日曜法の危機に至るまでの時期の到来も告げた。」イシュマエルの息子たちの十二の名の定義は、前述の文中の太字でいずれも示されている。

イシュマエルの系譜に挙げられた十二の名は、イシュマエル自身も数えに入れるなら十三になります。十三は「反逆」を象徴する数であり、ハガルが行ったのもまさにその反逆で、そのためにアブラムはハガルとイシュマエルが追い出されることを許しました。パウロはその出来事を用いて、神の契約の民としての古代イスラエルが退けられることを

描き、同時に、神がご自身のキリスト教徒の花嫁と契約を結んでおられたことを語っています。

というのは、こう書かれているからである。アブラハムには二人の息子がいて、一人ははしためによって、一人は自由の女によって生まれた。しかし、はしための子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれた。これらの事柄は寓意である。というのは、これらは二つの契約を指しており、一つはシナイ山から出て、子を奴隷として生む契約、すなわちハガルである。というのも、このハガルはアラビアにあるシナイ山に当たり、今あるエルサレムに対応していて、彼女はその子らとともに奴隷の身にある。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、彼女は私たちすべての母である。こう書かれている。「子を産まない不妊の女よ、喜べ。産みの苦しみを知らない女よ、喜び叫べ。夫のある女よりも、見捨てられた女のほうが多くの子を持つからである。」さて、兄弟たち、私たちはイサクのように、約束の子である。しかし、その時、肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今も同じである。では、聖書は何と言っているのか。「はしためとその子を追い出せ。はしための子は、自由の女の子と共に相続人となつてはならない。」このようにして、兄弟たち、私たちは、はしための子ではなく、自由の女の子である。ガラテヤ人への手紙 4:22-31.

イシュマエルはイスラム教の象徴であり、イシュマエルの母であるハガルは死の契約の教会の象徴である。イサクはキリスト教の象徴であり、サラはいのちの契約の教会の象徴である。ゆえに、イシュマエルには十二人の息子がいた。というのも、十二という数は神の契約の民の象徴であり、イスラム教は神の契約の民のにせものであるからだ。

福音書にはキリストの系図が二つある。ひとつはマタイ、もうひとつはルカにある。

ヤコブは、マリアの夫であるヨセフをもうけた。このマリアから、キリストと呼ばれるイエスが生まれた。こうして、アブラハムからダビデまでが十四代、ダビデからバビロン捕囚までが十四代、バビロン捕囚からキリストまでが十四代である。さて、イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、ふたりがまだ一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。マタイによる福音書 1:16-18.

マタイの系図は、十四代ずつの三つの区分があり、それらが合わせて四十二代という一つの全体を成していることを示している。契約の歴史において、モーセがアルファであるのに対し、キリストはオメガである。モーセは、キリストが「自分に似た者」とであると預言している。モーセの百二十年の生涯には、四十年ずつの三つの期間があった。モーセの各四十年期を行に行を重ねるように並べると、いずれもカデシュで終わる。カデシュは1863年と日曜法の象徴である。キリストの三つの期間は、ダビデ、バビロンへの捕囚、そして十字架でご自身の血によって契約を確証された時で終わる。ダビデは、日曜法の時に勝利の教会が高く掲げられることを表しており、第二の線は、日曜法の時に愚かな乙女たちがバビロンへ連れ去られることを示している。第三の期間は十字架で終わり、十字架は再び、キリストが十四万四千人に対するアブラハムの契約と、大群衆に対するノアの契約を確証される日曜法を象徴している。

これら二つの線を重ね合わせると、驚くべきことがわかります。モーセの百二十年はノアの百二十年と呼応し、キリストの四十二代は、日曜法のときに反キリストが象徴的な四十二か月間支配することと呼応します。

主は言われた。「わたしの霊は、いつまでも人と争うことはない。人もまた肉にすぎないからだ。しかし、その日々は百二十年としよう。」創世記 6:3

アブラハムの契約を強調するマタイの系図と並んで、ルカが示すキリストの系図は創造にまでさかのぼり、エデンでアダムが破ったいのちの契約を強調している。ルカの系図はイエスから始まり、神の子とされるアダムにまでさかのぼる。その系譜は、完全な第二のアダムで終わり、完全な第一のアダムで始まる。第一のアダムから第二のアダムに至るまでが77代として示されている。

聖書の系図は、真理の筋道を示している。私たちは今しがた、真理を立証するのに求められる証人の数をはるかに上回る証言をもたらず系図をいくつも確認した。これらの系図には、歴史的成就と将来の予言の声が含まれており、さらに、その中に置かれた数的な謎が第二の声を与えているため、秘密を数える不思議な御方パルモニの声も含まれている。これら二つの声は、さらに第三の声、すなわち、人・場所・物の名を含む万物を創造し支配しておられる、不思議な言葉の御方の声とともに聞こえてくる。

ヨハネが背後からの声を見ようと振り向いたとき、その声は大水のとどろきのようにであり、ダニエルが同じ幻を見たときには、その御声は群衆の声であった。聖書の表面的なメッセージ、そのメッセージに付随して記されている名前、さらにその中に示されている数——これらは一つの箇所における三つの声である。三つの声を帯びた一行を、平行する別の一行の上に重ねると、三つの声は多くの声となる。

また、御座から声が出て、こう言った。「私たちの神を賛美せよ、すべてそのしもべたちよ。神を恐れる者たちよ、小さい者も大きい者も皆。」また私は、大群衆の声のような、多くの水のとどろきのような、また力強い雷鳴のような声を聞いた。「ハレルヤ。全能の主なる神が王として支配しておられる。」黙示録 19:5、6

イスラエルの王たちの系譜の中に、最も重要なものがいくつかある。北王国イスラエルの最初の七人の王は、アハブ、イゼベル、そしてエリヤで終わり、ゆえに日曜法を表している。北部諸部族における最後の七人の王の系統は、日曜法から始まり、ダニエル書12章でミカエルが立つとき、すなわち恩恵期間の終わりで終わる。ユダの最初の七人の王は、日曜法からミカエルが立つ時までの歴史を示し、最後の七人の王は、日曜法に至る歴史を指し示している。二つの系譜は、いずれもアルファの歴史とオメガの歴史を持つ。アルファの歴史は9/11から日曜法までの期間であり、オメガの期間は日曜法から恩恵期間の終わりまでである。イスラエルの最初の七人の王はユダの最後の七人の王と対応し、イスラエルの最後の七人の王はユダの最初の七人の王と対応する。

続きは次回の記事でお届けします。

最後まで揺るぎなくあれ

[ヨハネの黙示録1章1、2節、引用.] 聖書全体は啓示である. というのは、人へのあらゆる啓示はキリストを通して与えられ、すべては彼を中心としているからである. 神は御子によって私たちに語られた. 私たちは創造と贖いによって御子に属する者である. キリストはパトモス島に流されていたヨハネのもとに来られ、この終わりの時代のための真理を彼に与え、やがて速やかに起こるべきことを彼に示された. イエス・キリストは神の啓示をゆだねられた偉大なお方である. 私たちがこの地の歴史の終幕において何を見定めるべきかを知るのは、彼を通してである. 神はこの啓示をキリストにお与えになり、キリストはそれをヨハネに伝えられた.

愛する弟子であるヨハネは、この啓示を受けるために選ばれた者であった. 彼は、最初に選ばれた弟子たちの最後の生存者だった. 新約の時代において、彼は旧約の時代に預言者ダニエルが受けたのと同様に栄誉を受けた.

ヨハネに伝えられるべきその教えは非常に重要であったため、キリストは天から来てご自分のしもべにそれを与え、諸教会に送るよう命じられた. この教えは、注意深く祈りつつ学ぶべきものである. というのも、聖霊の教えの下にない人々が偽りの理論を持ち込む時代に私たちは生きているからである. これらの人々は高い地位にあり、遂行すべき野心的な企てを抱いている. 彼らは自らを高め、事物の様相全体を一変させようとする. 神は、そのような者たちから私たちを守るために特別な教えを与えておられる. 神は、地上の歴史の終幕に起こるべき事柄を書に記すようヨハネに命じられた.

その時が過ぎた後、神は、忠実な信徒たちに、現在の真理の尊い原則を託された. これらの原則は、第1と第2の天使のメッセージを伝える働きに何の関わりも持たなかった人々には与えられなかった. それらは、初めからその働きに加わっていた働き人たちに与えられた.

こうした経験を通ってきた者たちは、私たちがセブンスデー・アドベンチストにした原則に関して、岩のように堅固でなければならない. 彼らは神とともに働く者となり、証しを巻き、律法をその弟子たちのうちに封じる者である. 私たちの働きを聖書の真理という土台の上に打ち立てることに加わった者たち、正しい道を指し示してきた道しるべを知っている者たちは、最も尊い働き人と見なされるべきである. 彼らは委ねられた真理について、自らの体験から語ることができる. これらの人々は、自分たちの信仰が不信仰へと変えられることを許してはならない. 彼らは、第三天の旗印をその手から取り上げられることを許してはならない. 彼らは初めの確信を終わりまで堅く保たなければならない.

私たちが最後の働きに入るにあたり、過去の歴史が語り直されると主は宣言しておられる. 終わりの時代のために主がお与えになったすべての真理は、世界に向けて宣べ伝えられなければならない. 主が立てられたすべての柱は、さらに強められなければならない. 今や、神が据えられた土台から外れることはできない. 今や、いかなる新しい組織にも入ることはできない. というのも、それは真理からの背教を意味するからである.

医療宣教の働きは、神の民の過去の経験に対する信徒の信仰を弱めかねない一切のものから、純化され、清められる必要がある. エデン、あの美しいエデンは、罪が入り

込んだことで墮落した。今、私たちの働きが初めに確立されたときに役割を果たした人々の経験を、繰り返し語る必要がある。

時折、私たちは世の偉人たちの訃報を目にする。

彼らの時は、まるで一瞬のうちに突然やって来た。健康だと思われていた多くの者が、宴ののちに、あるいは自らの栄達を図る利己的な計画を練ったのちに死ぬ。次の言葉が告げられる。「彼は自分の偶像に結びついている。彼をそのままにしておけ。」

これは、主がもはや彼を災いから守らないことを意味する。

急死が訪れ、彼の生涯の仕事には何の価値があるのか。彼の人生は失敗であった。それを支えていた力が、偶像礼拝の供え物としてその木を委ねて去ってしまうので、その木は倒れる。

男も女も、何か楽しみを求めることに没頭している。彼らは何の価値もないもののために魂を売り渡し、神はその長きにわたる寛容を取り去られる。彼らは自らの選択に委ねられる。

「現在の真理を信じると公言しながら、その信仰を貶め、光のうちを歩むことを拒んでいる者たちがいる。今こそ、自己中心で世俗的な原則を捨て去るのはだれか。今こそ、魂の価値を悟るために努めるのはだれか。たとい人が全世界を得ても、自分の魂を失ったら、何の益があろうか。あるいは、人は自分の魂と引き換えに何を与えることができようか。あなたがたはいのちのパンと救いの水に飢え渴いているだろうか。キリストがそのために死なれた魂の価値を、あなたがたは悟っているだろうか。クリスチャンであるとされる者たちは、その信仰の告白にかなって生きているだろうか。彼らは魂の価値を自覚しているか。彼らは真理への従順によって自らの魂を清めようと努めているか。」 Manuscript Releases, 第20巻, 150, 151.